

0 会の活動

加藤 瑞穂

0 会については、戦後日本美術を代表する前衛グループ「具体美術協会」（以下、具体）を語る時には必ずと言ってよいほどその名が挙げられます。なぜなら、具体の主要メンバーであった白髪一雄、金山明、村上三郎、田中敦子が、具体加入以前に参加していたグループだからです。彼ら 4 人が 1955 年に 0 会から具体へ合流したという事項は、具体の年表では重要項目の一つとして扱われるのが普通です。しかし 0 会が実際にいつ、どのような活動を行っていたか等の詳細は、これまで資料がほとんど見つかっていなかったため、長らく不明でした。このたび、幸いにも関係者の方々の手元に複数の資料が残されていたことがわかり、それらを元に 0 会の活動について、現時点で判明した点や、浮かび上がってきた課題をまとめてみたいと思います。

まず 0 会はしばしば、新制作協会で先鋭な作品を発表していた若手作家たちが中心となって 1952 年頃結成され、その代表的存在が、金山、白髪、村上と記述されてきましたが、白髪、村上には当てはまるとしても、実は金山に関しては当てはまりません。金山の 1940 年代後半から 1950 年代前半の活動は、これまでその時期の資料が全くといってよいほど見当たらなかったため、白髪、村上と共に行動していたかのように推測されがちでしたが、ごく最近になって確認された資料から、金山の当時の様子がようやくおぼろげながらも浮かび上がってきました。

その資料とは、金山が保管していた、大阪商業高校時代の親友グループとの交流記録ノートです。ここには、太平洋戦争直後の 1946 年から、金山が具体を退会して約 3 年後にあたる 1968 年までの間に、この親友たちとの会合の日とその概要が記載されています。ここに金山明彦と書いてあるのが、金山明です。1968 年は 1 度だけ長い年月を空けて催されており、それ以外は 1946 年から 1956 年まで、1953 年を除いて毎年会合が持たれていたことがわかります。一年あたり平均して約 6 回集っており、殊に 1954 年は 9 回の記載があることから、彼らがどれほど親しかったかを窺い知ることができます。そのノートの記述から、金山の展覧会出品歴や作品の制作年などを書き換える必要があることが判明し、さらには 0 会の活動時期についても、再考を迫られることになりました。

最初に金山の新制作展への出品について、同展出品目録の調査で、このノートの調査以前にすでに判明していましたが、金山の初出品は 1954 年の第 18 回展です。ノートでは、「1954 年 10 月 3 日 金山の絵が新制作展に入選したお祝」と記されており、初めてかどうかには言及していないものの、それ以前には一切新制作展についての記述が見つからず、また他の公募展への出品は克明に記載されていることから、新制作展については 1954 年が初であることが、改めて裏付けられることになりました。

それ以前の展覧会出品について注目すべきは、同じ 1954 年の第 4 回関西総合美術展（大阪市立美術館、3 月 31 日～4 月 25 日）と、モダンアートフェア（心齋橋大丸・大阪、5 月 4 日～9 日）であり、いずれもこのノートの記述から作品が特定できました。第 4 回関西総合美術展については、これまで出品歴に挙げられてきませんでした。ノートに同展に関する言及があり、出品目録を参照すると、《作品（A）》を出品していることが新たに分かりました。さらにノートにおける記述と、作品裏面のラベ

ルを考え合わせると、この作品が現存する《作品（A）》に相当すると考えてほぼ間違いないと思われます。また、モダンアートフェアについては、すでに出品歴には挙げられていましたが、出品された《作品》が、いったいどのような作品であったのかは、これまで特定できませんでした。しかしこのノートから、現在芦屋市立美術博物館に収蔵されている《WORK-C4》であることが明らかになりました。これらについて、実際にその手記を参照しながら、より詳しく見ていきましょう。

写真は、金山の親友の一人である伊藤由紀夫が1954年5月7日付で記載したもので、モダンアートフェア会場であった心齋橋の大丸百貨店を訪れ、金山の《作品》についての感想をまず述べ、続いてそれよりも前の第4回関西総合美術展に出品された作品を思い起こし、批評を試みています。字が細かいので画像では見にくいと思いますが、モダンアートフェアを訪ねたと書いてあります。その出品作については、次のように述べました。「横に長い三十号の変型で、白い木の小さい枠がはめられている。用紙は小さい英字が並んでいるB/Lの用紙の裏。蔭のごとく淡い黒で円弧が描かれて、その上に幾何学的な簡単な線がとおつている。大へんユニークだが、それだけにナイーヴな作品である」。(註：B/LはBill of Ladingの略で、船荷証券を意味する。)この記述は、まさに《WORK-C4》に合致します。

また伊藤は、第4回関西総合美術展出品作については、個人的にはより好ましいと感じた旨を記しつつ、次のように描出しています。「赤と青の線と円、それがすっきりと澄んでいた。重々しいタブローの並んでいる部屋の中で、ただ1枚だけ、別行動をとって、現代知性のメルヒエンを奏でているようだった」。ここで述べられた「赤と青の線と円」という記述は、《作品（A）》の特徴に十分当てはまります。実は、現存する《作品（A）》の裏面には、署名や年記が通常入れられることがない当時の金山の作品では珍しく、タイトル「作品（A）」と作者住所、作者名が明記された大きなラベルが貼付されていることから、本作が公募展に出品された可能性が高いと判断できます。以上から、現存する《作品（A）》が、第4回関西総合美術展出品作の《作品（A）》に相当すると考えるのが自然でしょう。

さらに興味深いことに、伊藤によるこの5月7日付の手記には次の一文が含まれています。「この二回の展で、金山がはっきりと無形象の世界の扉を追求しはじめたことを知った」。ここから読み取れるのは、金山の第4回関西総合美術展やモダンアートフェアへの出品作2点が、金山の抽象作品の最初期に位置するという点です。しかもそれは、金山にとって公の場で自作を発表する初の機会であったことが、ノート全体の内容からも裏付けられます。というのも、伊藤による1954年5月7日付の手記より前には、金山の展覧会出品については全く記述がなく、これほど親しい間柄のグループの会合で、公募展等への入選や作品発表が話題にならないはずはないと考えられるからです。5月7日付の伊藤の手記がここまで詳細であるのは、それが初めてであったからにちがいないと思われます。

そこで再考を迫られるのがこの二つの公募展出品作である《作品（A）》および《WORK-C4》の制作年です。これまで《WORK-C4》には年記がなく、出品歴も明らかでなかったため、主に金山自身の記憶を元に1951年頃とされていましたが、上記の考察で、1954年頃とするのが妥当と考えます。また《作品（A）》は、そのスタイルから《WORK-C4》よりもやや早いけれども、やはり同時期と見なせるため、1951年頃とされていましたが、これについても1954年頃とするのが理にかなっているでしょう。

その結果、従来1951年頃とされてきた船荷証券（B/L紙）を使用した作品は、いずれも1954年頃と

3年ほど後になり、さらにはB/L紙の作品から展開した、画面の周囲にのみ短い線を数本描いた作品群、すなわち具体のリーダー・吉原治良が、モンドリアンの次を追及したと高く評価した作品群、あるいはそれに続いて手がけられた2つの円を画面に配置した一連の作品群の制作年をも、1954年頃と考えざるを得なくなるでしょう。

そして、再びこのノートを参照すると、1954年5月21日に「今日は画会の相談である」、同年7月17日に議題として「画会の結論の件」と記されています。「画会」というのは、この親友グループとは別の、絵のグループを指すと思われ、また1954年以前には一切「画会」についての言及がないことから、1954年5月頃から金山が「画会」の活動を本格化させたことが窺えます。この「画会」こそ「0会」を指すのではないのでしょうか。このノートには0会という文字は見当たりませんが、金山が親友たちに「0会」について語っていないというのは不自然であり、おそらく1954年7月17日の時点で、「画会」にまだ正式な名称が付けられていなかったためだと推察できます。

0会の名称がいつ固まったのかについては、これまで存在が明らかでなかった別の資料を参照すると、よりはっきりと浮かび上がります。この別の資料とは、1954年から55年にかけて白髪や金山から村上に宛てられた、0会関連の例会案内はがきで、現在のところ少なくとも10通確認できています。1954年8月から1955年4月までの消印が押されているこれらを参照すると、「0会」という名称が使われ始めたのは1954年10月以降で、その後も「∞会」（無限大会）という別の名称が使われたことが少なくとも1回あったと分かります。また1954年8月には「モダンアートの会」となっており、名称が定まったのが1954年秋から55年にかけての時期と推察されます。

より詳しく見ていけば、1954年8月27日消印で、白髪より村上に宛てられたはがきでは、「先日お話ししてありますモダンアートの会やります 来て下さい 八月三十日（月）后七時半 白髪宅」とあり、0会とは記載されていません。しかし、その2ヶ月足らず後の1954年10月16日消印で「0会例会通知」と明記されて、金山から村上宛にはがきを送付されていることから、白髪の記した「モダンアートの会」は「0会」と同一である可能性が高いと思われれます。なぜなら、白髪は1950年頃から、村上はそれより少し前の1949年から洋画家・伊藤継郎のアトリエに通い、共に新制作派展へ出品し、1954年7月には二人展も開催した近しい仲間であると同時に、金山は、白髪の「子供の頃からの画友」であって、白髪にとっては村上と知り合う前からの親しい友人であることを考え合わせると、金山が白髪の言う8月30日の「モダンアートの会」にも参加していたと考えるのは極めて自然で、それが10月には「0会」になったと考えられます。

現在のところ最初に「0会」という名称が明記された、10月16日消印のはがきには、例会が10月19日に金山宅で開かれるという通知と略図に加えて、「十八日より開催の新制作展出品画（村上彦出席 私の作品）を各々批評し合う事 近作あれば持参を乞」と添書きがあります。つまり第18回新制作展が大阪市立美術館で10月18日にオープンした翌日に、その出品作について批評し合うという趣旨で、略図が添えられてあることから想像するに、村上にとっては金山宅の妙法寺を訪れるのはこのときが初めてであった可能性があります。

その後、1955年4月に至るまで、一ヶ月に少なくとも一度、午後6時ないし7時前後から、白髪宅

もしくは金山宅で会合が持たれたことが案内はがきから明らかになりますが、1954年12月には、「0会」でなく「∞会」と記載されており、まだグループの名称が定まっていなかったと見受けられます。1955年1月以降は「0会」で統一され、2月22日の例会通知では「0会8回例会」と記されていることから、「0会」としての活動が本格化するのには1954年秋以降と見るのが自然でしょう。この「0会」の会合は、すでに触れたとおり、各人の作品を批評し合うなど研究会的な性格が強く、その議題としては、「白髪・村上の新作を切る会」（1954年12月）、「モダンアートと制作態度」（1955年2月）、「発想とマチエール」（1955年3月）、「木下淑子さんの絵について」（1955年4月）が明らかになっています。また、会費については毎回徴収し、1954年12月は30円、その後1955年2月以降は50円であったことも併せて分かりました。

さて、これら例会のうち、最後の「木下淑子さんの絵について」が議題になった1955年4月19日の例会については、興味深いことに他の資料においても言及されています。それは上前智祐の日記です。上前は1947年以後2010年に至るまで226冊に及ぶ詳細な日記を残しており、1955年3月29日から7月21日を記した第18冊目を参照すると、4月19日には「具体と0会との合同例会 白髪氏宅では20人程集まる。」という記載が見つかります。つまりこの例会には、0会メンバーのみならず具体のメンバーも参加していたのです。そして、その後の0会例会案内はがきは現在のところ見つからず、それに続く村上宛の現存する例会案内は、1955年5月6日消印で送られた1955年5月9日の吉原治良宅での「具体例会」であること、また上前の日記にも4月19日以後は「0会」の記述がないことから、この例会以後、0会の主要メンバーであった金山、白髪、田中、村上の具体加入が検討されたと目されます。

上前の日記にこのメンバーへの言及が最初に見つかるのは、1954年8月20日から11月19日を記した第16冊目で、1954年11月18日のゲンビ展懇談会に関する記述です。「現美展の会場で吉原先生に僕の作品褒められる。懇談会に出席した人の中で僕の知った人は、吉原（先生）、須田、植木、中村、津高、陰山、榊山、岡本、関根、吉原（英夫）、吉原（通雄）、山崎、嶋本、金山、船井」。そして、先の合同例会に言及した第18冊目では、1955年3月29日に「具体の例会で吉原先生宅に参席する。金山氏、白髪氏等も見えている。」という記述があることから、遅くとも1954年後半から0会メンバーと具体メンバーは直接顔を合わせる機会があり、1955年3月には互いに近い存在となっていたことが窺えます。この点は、彼らが具体へ参加する以前に嶋本昭三が0会の例会に数回出席し、田中敦子の数字の6を並べた作品を見て感心したという村上の回想によっても裏付けられます。（註：村上三郎、白髪一雄（聞き手：塚村真美）「具体的な話」、芦屋市立美術館編『具体展Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』財団法人芦屋市文化振興財団、1994年、pp.202-219 [特にp.204]）

以上、これまで参照されたことがほとんどなかった資料群から、明らかになった点をまとめると次のようになります。すなわち、金山の作品のうち従来1951年頃とされていた、0会時代の作品2点が、実はいずれも1954年頃であり、同時期の他の作品群も1954年頃である可能性が極めて高い点、そして0会の活動時期については、その名称が定まったのが1954年10月頃で、以後ほぼ毎月、各自の作品を持ち寄って批評し合い、ある議題で討議するなど研究会的な会合を持っていた点、さらにはその

時期に具体メンバーと面識を持ち、互いの例会に出席して、1955年4月には合同例会を開くに至ったという点です。

それゆえ0会の結成については、その名称が固まった時期を結成とするならば、これまで認識されてきた1952年頃というよりも1954年頃とするのが妥当でしょう。0会の結成年を1952年頃とするのは、主に白髪の記憶に基づいていたと思われ、発表者が2000年5月14日付文書で白髪に確認した際にも、5月16日付の返信で、「非常に曖昧」としつつ「1952年11月前後」との回答をいただきました。ただ、新しい資料を参照すれば、1952年末は早すぎると考えざるを得ず、それ以外に、村上也具象的なモチーフを描いていた時期だったことを勘案すると、やはり数年後と考えるのが自然でしょう。

ところで0会に実際どのような画家が参加していたかについては、新しい資料においても完全には判明しませんでした。一部確認できたメンバーがいました。その資料とは、1955年1月に村上が体調不良のため0会の新年会を欠席した折にお見舞いとして寄せ書きが記されたはがきです。白髪、金山に続いて数人が書き連ねていますが、この中で「代喜」は代喜香一郎、「朔子」は中橋朔子、「ミゾベ」は溝部都と思われる。彼らは皆、1955年6月9日付『毎日新聞』阪神版8面に掲載された第8回芦屋市展紹介記事では、「大阪新制作派研究所のグループである“ゼロ会、”のメンバーとして紹介されており、彼らの他に、神戸のバベル美術協会の会員でもあった神吉定や、関西学院大学の絵画部・弦月会に所属していた柴田健の名前も挙がっています。新制作派研究所とは、小磯良平に師事した西村元三朗、網谷義郎ら当時の若手が集った研究会のようで、1952年秋に新制作派研究所の名を冠した発表会が開かれたといえます。（註：伊藤誠「兵庫県美術界の20年」『神戸新聞』1965年2月1日、7面）

なお、第8回芦屋市展紹介記事で留意したいのは、田中敦子が白髪らと共に入選者として紹介されているものの、0会とは別に単独で扱われ、文中では「京都の美術学校を中退、現在は天王寺の市立研究所に通っている」と記載されている点です。つまり田中は0会の中心メンバーとして活動していたというよりも、金山を介して時折例会に出席していたというのが実情だったのではないかと考えられ、田中が新制作展には一度も出品していないという点も、それを傍証するでしょう。

併せて注意したいのは、現在では全くといってよいほど言及されませんが、この記事で0会メンバーとして名前が挙げられた一人である柴田健の存在です。実は柴田は、金山、白髪、村上、田中と同じように、具体が最初に公に作品を発表した1955年7月の「真夏の太陽にいどむ野外モダンアート実験展」に具体会員として出品していることから、0会の具体への合流に際しては、金山、白髪、村上、田中と同時にないにしても、柴田も時を置かずに加入したと考えられます。

そしてこの記事に関してもう一点注目したいのは、彼らの具体への合流時期が、1955年6月の第8回芦屋市展の後であることを裏付ける点です。これはすでに1990年代初めに明らかでしたが（註：芦屋市立美術博物館編『具体資料集-ドキュメント具体 1954-1972』財団法人芦屋市文化振興財団、1993年、p. 32）、この機会に改めて確認しておきたいと思います。記事では、芦屋市展入選作品のうち「変り種」を取り上げていますが、田中敦子や先の0会メンバーに関する記述とは別に、具体メンバーの

入選者について次のように言及しています。「入選作品をみると吉原治良氏の主宰する画会「具体」の会員である島本昭三（正会員）木下淑子（春陽堂賞）上前智祐、関根美夫（正会員）鷺見康夫（河内賞）橋上よし子（ターナー賞）らの人々が活躍しているのが注目される」。つまり、1955年6月の時点では、金山や白髪、村上、そして田中はいまだ具体メンバーではなかったのです。その後、1955年7月の野外具体美術展には会員として出品していることから、具体への合流時期は1955年6月下旬から7月にかけての時期と言えます。

さて、新しい資料を参照しても依然として詳細が不明であったのは、一度だけ大阪・心斎橋のそごう百貨店ショーウィンドウで開かれた0会展の詳細です。発表者が2000年5月14日付文書で行った白髪への問い合わせに対する同年5月16日付け返信では、「未だはっきりせず申し訳ありませんが」と断った上で、「多分1954年の10月かそれ以降」と記されていました。しかし文書、写真などの資料は一切見つかっていないため、現時点ではその開催時期や規模を確定することは残念ながらできません。

また、実際にどの作品が出品されていたかについても、作家自身の記憶に頼らざるを得ない状況ではありますが、そごう百貨店での展覧会の様子については、同時代の作家に関する資料の中に、当時の状況を伝える可能性がある写真が見つかりました。これは、1956年に結成されたグループ・制作者集団「極」、先ほど佐藤さんのご発表にもありました、制作者懇談会と合同展覧会を行った制作者集団「極」の中心メンバーであった片山昭弘が1955年頃に、そごう百貨店の御堂筋側ショーウィンドウで自作を展示した際の記録写真です。白髪から発表者に2000年5月24日および26日に送られた自筆の年譜を参照しても、0会展は御堂筋側ショーウィンドウだったと記されており、同じ店内に二つも別の展示場があるとは考え難いため、写真の場所が0会展の会場でもあったという可能性は高いと思われます。窓の上には「ASAHI ART CORNER」という字が見え、ここで定期的に美術作品が展示されていたようですが、パーティーは全くなく、窓際に絵が吊られただけの状態に見えます。もっとも、街路を歩く人の目には入りやすく、もしこの場所に0会メンバーが作品を展示したのならば、このような場を得られたのは幸運だったはずで、というのも、1950年代半ばはまだ貸画廊のようなシステムが確立しておらず、公募展以外には作品発表の場がほとんどなかったからです。

最後に、当時の0会メンバー集合写真について触れておきたいと思います。冒頭にもお見せしたこの写真は、1952年頃に金山の自宅である妙法寺離れで撮影されたメンバー（金山、村上、白髪）の集合写真とされてきました。しかし、このたびの一連の調査で、同じ日に撮影されたことが見て取れる別の写真および1950年代前半に撮影されたことが明白な、また別の写真との比較から、従来集合写真と言われていたものは活動当時でなく、もっと後の時期に撮影されたものだと言わざるを得ないことが明らかとなりました。最初に、同じ日に撮影されたと思われる写真を見てみましょう。

これは妙法寺で撮影されたもので、左から村上、白髪、金山、田中が写っています。村上、白髪、金山の服装や髪型が、従来0会メンバー集合写真として扱われてきた写真と同一であることから、同じ日に撮影されたことは間違いありません。この写真では背後左手に金山の電動機器で描いた作品、右手上方にはポール・ジェンキンスと思しき作品が壁にかけられています。金山作品は、そのスタイ

ルに鑑みるとどれほど早くても1960年前後であり、またジェンキンス作品と思われるものは、彼のグタイピナコテカでの滞在を考えると、1964年と推察されます。そして、田中、金山、白髪の髪型が、1964年12月頃に撮影された彼らのポートレートと同一であり、殊に田中のパーマをかけたミディアムの髪型は、今のところ1964年のポートレートにしか見られないため、集合写真が1964年頃の撮影とみなすのは自然でしょう。

次に1950年代前半に撮影されたことが明白な写真は、同じく妙法寺で撮影されたもので、左から白髪、息子の久雄、妻の富士子、村上、金山の妻の絢子、金山が写っていますが、1949年に生まれた久雄の年恰好、そして1950年に結婚し1957年に没した金山の妻・絢子がいることを考え合わせると、1953-54年頃と判断するのが妥当でしょう。1954年の村上彦・白髪一雄二人展会場で撮影された村上・白髪のポートレートと比較しても、そのことは裏付けられます。つまり、この写真こそ0会時代のメンバーの集合写真と言えるのではないのでしょうか。

以上、0会について、このたび新たに確認された資料を元に、結成年の見直しの必要性や活動の概要、構成メンバー等について述べてきました。発表で指摘したとおり、いまだ0会メンバーの全容や0会展の詳細については解明すべき点が残されていますが、少なくとも0会は、研究会的な意味合いが強いグループであったことが改めて浮き彫りになりました。それゆえに各メンバーは、0会だけでなく他のグループにも属し、議論や作品発表を通して相互研鑽を積んだと推察されます。

今回は触れられませんが、彼らの作品が、具体に加わることによってどのように変化したのか、そして加わった後も一貫していた点は何であったのか、さらには0会メンバーが具体でどのような役割を果たしたのかについて詳細に検討することが今後の課題となります。

最後になりましたが、本発表にあたって、金山、田中、白髪、村上、片山各先生方のご遺族の皆様、上前先生およびご家族の皆様、そして尼崎市総合文化センターにたいへんお世話になりました。ご協力に深く感謝申し上げます。また、資料整理にあたってご助力いただきました学生の皆様にも感謝いたします。以上で発表は終わります。ご清聴ありがとうございました。